

「臨界60周年記念 ～実物に触れることの大切さを学ぶ～」

技術課長補佐 稲垣昌代

今から30年前、エネルギーや環境問題に特に関心があったわけでもなく原子力に関してもほとんど知ることがなかったが、学生時代に選んだ研究室が放射化学薬品学研究室だったことがきっかけとなり、なぜか職業として原子炉施設などの放射線管理を選択した。この研究所に就職して初めて極低出力の原子炉と出会い、原子炉とさりげなく接する先生方の傍らで、ほとんど知識のない私は新鮮さと戸惑いを感じながら原子炉と向きあい、そして気が付けばいつのまにか30年経過していた。2021年11月11日に近畿大学原子炉が臨界60周年を迎えるにあたり、その半分の時間を共に歩んできたのかと思うと、なんだか妙に感慨深い。今回は、この記念すべき年に研究所の一員としていつもと変わらず業務に携われることに感謝し、技術職員として今までの業務を通して学んだこと、そして思うところを僭越ながらここに述べさせていただきたい。

私の技術職員としての仕事場は、熱出力1Wの教育研究用のこの近畿大学原子炉である。もちろん発電する仕組みは持っていない。商用発電炉はおよそ熱出力30億Wであり、規模の違いは歴然である。しかし、1Wの原子炉であっても、私にとっては常に五感を研ぎすまし、それをどう判断するかセンスを磨かなければならない現場である。原子炉の管理には五感がとても重要である。施設内の空間を流れる音、肌感、におい、姿や動きが、いつもと違う場合はすばやくキャッチしなければならない。原子炉運転中のわずかな音の違い、排風機の振動の変化、サーベイメータの針の微妙な振れ幅など、多種多様なメッセージがある。それらメッセージを捉えるセンスは、机上では習得できない。その場に毎日通い触れていないとわからない息づかいである。おそらく、どの現場にもこの五感とセンスをフルに活用している担当者がいるはずだ。現場に携わる者のセンスを磨くことは重要で、実物に触れて実感することの大切さを常に感じている。これが、私の学んだことである。

近畿大学原子炉は、2013年12月に当時の新規制基準を試験研究炉にも適用されたことにより、しばらくの期間は運転停止を余儀なくされていた。2017年4月に悲願であった運転再開を果たし、原子炉の運転を利用した学生実験や研修会、文部科学省による人材育成事業、全国共同利用等を次々に再開した。今後のエネルギー政策の中で、原子力発電の立場がどのように遷移していくかは不透明であるが、机上での専門知識や技術の習得に加えて、実物に触れる経験をして、さらにはセンスも兼ね備えた人材の育成の場が必要であると考え。震災以降、原子力を志望する学生の減少が懸念されているが、現在でも、進学してきた学生の中には敢えて原子力分野を選んだ学生も多く含まれている。原子力の現場に携わる者だけでなく、原子力分野を志望する学生から一般人まで広くこの近畿大学原子炉の場をフルに活用していただき、多くの人々が実物を感じ、そのセンスを磨く現場に立ってもらえれば幸いである。

昨今、新型コロナウイルスが猛威を振るっており、その影響でオンラインによる運転や見学会が推奨される時代となった。しかしながら、臨界60周年を迎えた今後も、原子炉を安全に稼働させるために、放射線管理という業務には変わりはなく、この施設を支える基盤となる業務が足元から崩れないように精進してまいりたく、そして、これから原子力に関わる人々に是非、実物に触れることの大切さを伝播させていきたい。